

Chapter I ランの世界

ラン科とは? / 分布と生態 6 分類 / 形態 8 学名の表記 11

Chapter II ランの図鑑

バニラ亜科.....	16	キルトポディウム亜連.....	84
アツモリソウ亜科.....	18	エウロフィア亜連.....	85
チドリソウ亜科		マクシラリア亜連.....	86
● クラニキス連		オンシディウム亜連.....	100
シュスラン亜連.....	34	コエリオブシス亜連.....	128
ブテロステイリス亜連.....	35	スタンホペア亜連.....	129
ネジバナ亜連.....	36	ジゴペタルム亜連.....	134
コオロギラン亜連.....	36	オンシディウムの人工属.....	125
● ディウリス連		リカステ類の人工属.....	93
カラデニア亜連.....	37	ジゴペタルム類の人工属.....	137
オオズムシラン亜連.....	39	● エピデンドルム連	
ディウリス亜連.....	40	プレティア亜連.....	138
ドラカエア亜連.....	42	ホテイラン亜連.....	139
テリミトラ亜連.....	43	レリア亜連.....	140
● チドリソウ連		プレウロタリス亜連.....	167
ディサ亜連.....	44	オニヤガラ連.....	176
チドリソウ亜連.....	44	カトレヤ類の人工属.....	165
セッコク亜科		● ヤチラン連	
● エビネ連		セッコク亜科.....	177
サワラン亜連.....	52	ヤチラン亜連.....	191
セロジネ亜連.....	52	● サカネラン連.....	192
コラビラン連.....	61	● ボドキルス連.....	192
● シュスラン連		● ソブラリア連.....	195
カタセツム亜連.....	67	● ヒスイラン連	
カタセツム類の人工属.....	73	エリデス亜連.....	196
● シュンラン連		アングレクム亜連.....	216
シュンラン亜連.....	74	ポリスタキア亜連.....	220
		パンダ類の人工属.....	215

学名索引 221 略号索引 227 和名索引 229 主な引用・参考文献 238

本書は入門書として初心者の方々がランに興味を持つとともに、愛好家の方々にも新たな発見や知識を提供できるよう、最新の情報も含めています。

ラン科植物(以下、ラン)の魅力は、何といてもその多様性にあります。野生のランだけでも約26,000種あるとされ、被子植物では最大の種数を誇ります。また、今なお種分化し、新しい種が生まれつつあり、さらには自生地の調査が進むことで、毎年、約500種が新たに発表されています。ランは熱帯雨林から砂漠、草原から湿地に至るまで、さまざまな環境に適応して生息するため、その生態も多様です。本書では、野生ランの自生の状態も紹介しています。また、ランの花の構造は花粉を媒介する昆虫や鳥類と密接に関係しており、特定の花粉媒介者だけが受粉できるようにすることで、多様な花の構造が生み出されました。このような種類、生態、形態の多様性を写真とともに、楽しんでいただければと思います。また、その美しさより古くから人により交配が行われ、多くの種間交雑種や属間交雑種が作出されています。本書では151属、19人工属を扱い、野生種とその個体522種、人工交雑種99種、最近話題の遺伝子組換え植物を解説し、ランの多様性の魅力を楽しめるようにしました。また、ランに関するトピックスをオーキッド・トリビアとして紹介しました。

野生ランの多くは、開発による自生地の破壊や一部の悪質な園芸業者の大量な採集により、絶滅を危惧されているものが少なくありません。野生ランを学ぶことが、自然界全体の理解を深める手助けとなることを祈っています。また、ランの多様性を保護することは、地球上の生物多様性を守ることに繋がることを信じています。

近年、DNA情報に基づく分子分類学の発展により、ランの分類も大きく様変わりしています。本書は最新(2024年7月現在)の情報を基に、正確な学名表記に努め、Chapter I「ランの世界」とChapter II「ランの図鑑」で構成されています。Chapter IIでは属単位で解説し、属の配列順は“The Book of Orchids: A Life-Size Guide to Six Hundred Species from Around the World”(Chaseら, 2017)に基づきましたが、紙面構成上、一部前後したことがあります。属間交雑により作出された人工属については、交雑関係が理解しやすいように、交雑に関与した属の後にまとめて掲載しました。

本書で使用したすべての写真は、著者が調査の傍ら長年撮りためていたものです。また、本書で掲載したボタニカルアートは、著作権の保護期間を経過して社会の公共財産になり、だれでも自由に利用できるパブリックドメイン(public domain)となったものを、出典を明記して利用しました。

本書を通じて、ランへの関心をさらに深めるきっかけとなることを心から願っています。

最後になりましたが、出版の機会をいただいた淡交社の伊住公一朗社長と、編集を担っていただいた八木歳春氏に厚くお礼申し上げます。

2024年11月吉日